

はじめに

今回、編集部からこの連載のお話をいただいたのは、ちょうど定年にも近い歳になり、今までやってきたことを振り返り、まとめることもしなければならぬと思っていた矢先のこと、これも神の計らいなのかと思ひ、二つ返事で引き受けさせていただくことにした。やはり自分が辿った足跡を残しておくことは後進の方々のためにもなり、さらに発展していくための手がかりにもなるのではないかとも思ったからである。振り返ってみれば30年あまり天理教の日本語教育の中にどっぷりと浸かっていたことになり、国内・海外で貴重な経験をさせていただいたと思っている。天理大学別科日本語課程で通算7年、フランスの天理日仏文化協会で2年、天理教語学院で24年勤めてきて、その間、韓国へ留学もし、海外拠点の文化協会や出張所（ニューヨーク、パリ、香港、シンガポール）や南米（ブラジル、パラグアイ）の日本語教室を視察に回ったりして、一貫して天理教の日本語教育というものに携わってきて多くのことを学んだ気がする。しかし、それらができたのも先人の方々の努力があったから、自分もその道を通れたのかとも感じている。自分の経験が読者や後進の方々に役に立つのか、甚だ疑問ではあるが天理教の日本語教育というテーマでいろいろと話を進めていき、少しでもお役にたてればという思いで連載を進めていきたいと考えている。

天理教の日本語教育黎明期

『天理大学選科日本語科十周年誌』（天理教海外布教伝道部、1986年）によれば、天理教の日本語教育は中山正善2代真柱が戦後初めて海外を巡教した折、ハワイ、アメリカの二世への縦の伝道が話題となり、おぢばでの仕込みの必要性を感じたことから始まったようである。厳密に「天理教の日本語教育」といえば戦前・戦中に遡って、中国伝道の中で行われた現地での日本語教室のことなども含まれるかもしれないが、ここでは主に戦後から現在に至るものを取り上げていきたいと考えている。戦前・戦中に関するものは『天理教の活動と上海伝道庁一戦前・戦中の中国伝道』（天理大学おやさと研究所、2003年）所載の深川治道「戦前・戦中の上海・華中における天理教の日本語学校について」や、中国伝道に邁進した佐藤軍記『黄土に祈る』（天理教崇文分教会、1941年）があるので、興味を持たれた方はぜひ、一読されることをお勧めする*。

『天理大学選科日本語科十周年誌』の序文の中で当時の土佐忠敏表統領が次のように述べている。「北米・南米においては本教の信仰をもった一世の人たちの子弟が、すくすくと成長しており、その二世三世に対する縦の伝道のための現地の強い希望と前真柱様の深い思召により、現在の選科日本語科が設立されたと聞いております」（1頁）。天理教ではよく縦の伝道と言われるが、子弟へ信仰を引き継いでいくにも二世、三世と続いていくにはやはり言葉の問題があったと推察される。海を渡っていった一世は日本語で教理を修めてはいるが、現地で生まれ育った子弟の第一言語は現地の言葉であり、日常生活で両親が話す日本語は聞き取れても、親が話す深い教理の話まで理解で

きないことは想像に難くない。第二次世界大戦が終わり、新しい時代を迎え、2代真柱が海外に巡教に出られ、現地の方々の切実な思いに触れ、帰国後、すぐに行動されたことが現在に続く天理教の日本語教育のもとになっていると言っても過言ではない。

選科時代の初期

天理大学に選科日本語科が出来たのは1958年である。しかし、選科日本語科という器ができて、今までに前例のないことを始めているわけで、当時は相当な苦勞が



旧別科建物（現情報ライブラリー）

あったようだ。『天理大学選科日本語科十周年誌』では、1968年（昭和43年）3月2日に和楽館で「創立前後の模様」というタイトルの座談会が開かれ、その内容が詳しく書かれているが、苦勞の連続であった様子が伝わってくる（123～140頁）。宿舎の問題、授業を担当する教師の問題、校舎の問題など、天理大学、海外布教伝道部、いちれつ会の三者が話し合いを重ねて進めていったが、前例のないことを一から始めるわけで、試行錯誤の連続だった。授業に関しては天理大学が担当し、留学生の受け入れに関しては海外布教伝道部が担当し、受け入れに関する費用はいちれつ会が担当するというようにしてスタートしたようだ。しかし、授業に関しては大学の教員が受け持つとは言っても、その当時、今のような日本語教育が専門という人はおらず、国語国文学科や英米学科の教員が担当したようだ。また開校してからも柔道を目的に来日した者や日本語だけを習得したい者、信条教育を目的として来ている者など目的の違う者が入学していたようである。日本は高コンテキスト文化と言われており、非言語的メッセージに頼る文化であり、察しの文化とも言われるが、欧米の留学生や欧米以外の留学生でも低コンテキスト文化の国も多く、そのため、言葉でストレートに意見を言う傾向のある留学生に対して、日本人同士の以心伝心はなかなか通じず、入学した目的の異なるそのような留学生への対応に苦慮したことは容易に想像できる。

現在、天理教の日本語教育は大学の組織の中にあつた選科・別科（1958年～1996年）から形を変え、各種学校として天理教語学院（1994年～現在）に引き継がれているが、選科・別科時代の試行錯誤や先人の苦勞の蓄積の上に今の姿があるのだと感じずにはいられない。

* 『天理大学おやさと研究所年報』第5号（1998）～第14号（2007）に断続的に連載された深川治道氏の論文「天理教の日本語教育史」（1）～（7）がある。